

続

心が育つということ(最終回)

「向き合う」ということ

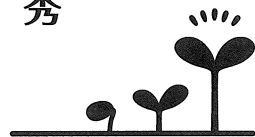
豊田一秀

本誌も冬号となり、四回にわたって執筆してきたこのエッセイも最終回となった。今回は、「向き合う」という言葉を中心に述べてみたい。向き合う、その過程を通して両者間に醸造される大切な心の育ちがあると考えるからである。しかし、同時に、人と人が向き合うことは実は簡単なことではない。場面を大学に移したい。

実習を前にしている学生から、「実習で、子どもたちとしっかり向き合ってきた」という言葉を聞くことが多い。この言葉から、私は学生たちの張り切った気持ちや、子どもと交わろうとする意気込み、すなわち、やる気を感じる。

しかし、半面、一抹の不安も同時に感じるのである。「向き合う」とはどのようなことだと、彼らは考えているのだろうか。人は、本人が向き合おうとすれば、すぐに相手と向き合えるものなのだろうか……。

以前、担任をしていたころのことである。なかなか向き合えない、おとなしい感じの女兒がいた。例えば、その子と手をつないでも、決して私の手を振り払うことはしない。はつきりと



拒否するわけではない。しかし、その子の手から伝わる何とも言えない気まずさ、距離感を私は感じていた。その子が私に対して心を開いていない感じを受けていたのである。

いろいろなと接近を試みてみた。話しかけたり、遊びに誘ったり、一緒にお弁当を食べたり……しかし空振りのことが多く、私は自分の心に課題を抱えたままであった。どうすれば、この子に近づけるのだろうか。

ある時、毎朝、その子がエプロンのポケットにお気に入りのキャラクターの付いたティッシュを入れてきていることに気付いた。私は、自分も同じモノを買い求め、遊んでいる時にさりげなくそれを取り出してみた。その子は、驚いたような顔を見ると、ポケットから同じティッシュを取り出し、私に見せてくれた。柔らかな視線であった。

その翌日から、登園すると、その子と私の間では、ティッシュを一枚交換するという朝の儀式が恒例となった。「おはようー」の言葉は出なかったが、一枚のティッシュ交換が、温かな朝のあいさつであった。そうこうしているうちに、私と手をつなぐ時の、その子の手の感触は屈託のないものへと変わっていき、その子自身も元気に園庭で駆け回る子となっていくた。

どこにでもあるような、小さな保育現場の出来事である。しかし、私にとっては、大きなことを教えられた一事であった。保育者としてきちつと悩むこと、ちゃんと困ること。すぐに良い答えが見つからなくてもあきらめずに、困惑の時を耐えること。

保育の世界では、「待つことが大切」とはよくいわれるが、イライラして待っていたのでは待つことにならない。^平そうかといって、忘れてしまったら待つていたともいえないであろう。抽象的な言い方だが、子どもと向き合おうとする時、「いつも、その子のことを思っている」

ことが大切なのだと思う。

そもそも、「向き合う」という言葉には、主体としての意図が感じられる。視線が感じられる。向き合いたい自分が中心にいる感じがするのである。しかし、向き合うと言うからには、自分だけが向き合いたいと思ってもこの関係は成立しないであろう。相手も同じように自分の方を向いてくれなければ、「向き合う」ことにはならないのである。

子どもにとって、相手が自分に関心をもってくれることはうれしくもあるが、時には重くもあるのではないであろうか。人の視線が自分に向けられていると意識した時、人は自由に動けなくなる。向き合おうとする人は、自分の視線について、その強さを意識しなければならぬであろう。

また、向き合おうとする気持ちの持続も問題になると考える。自分が向き合いたいと思った、その時だけ相手を見ていたのでは、向き合うことは難しいであろう。なぜなら、相手と向き合おうとする持続時間が短ければ、相手が自分を見た、「その時」を見落とす可能性が大きいからである。自分が相手を見ていない、その時に、相手は自分を見ている……。前述の視線の問題を考えれば当然のことであろう。

多くの場合、本人が向き合おうとしなければ相手とは向き合えないであろう。しかし、向き合おうとする視線が強い時、相手を不自由にする。また一方で、向き合おうとする気持ちに持続性がなければ、向き合うのはやはり難しい。向き合おうと意思する時に大切なのは、濃く短い時間ではなく、淡く持続する時間なのかもしれない。

こうして考えてくると、倉橋の二つの文章が思い起こされる。「子どもの心もちは、極めてかすかに、極めて短い。濃い心もち、久しい心もちは、誰でも見落とさない。かすかにして短き心もちを見落とさない人だけが、子どもと俱まじにいる人である。」^{注3}「用意なしに客を迎えてはならぬ。しかも、客を迎えてその用意を強いてはならぬ。用意は細心でなければならぬ。しかし、細心は当方の心がけであつて、それを客に示すべきものではない。」^{注4}

保育者は、発信する力とともに、いや、それ以上に、受信する感性を求められている。そして、その受信を基に次の発信がなされる。向き合う相手を子どもからいろいろと変えてみた時、親子、夫婦、兄弟姉妹、友達、恋人……それは、単に保育者のみに求められる事柄でないことにすぐに気付くのである。

(玉川大学)

注

- 1 津守房江は、その著書『育てるもの目』（フレールベル館一九八四年）の中で、以下のように語っている。「子育ての中で時には目をつぶることが大切だと思いが、いらいらしながらでは目をつぶったことにはならない。私は子どもに対して目をつぶるということは、祈ることであると思う。」
- 2 津守真は、その著書『保育の一日とその周辺』（フレールベル館一九八九年）において、以下のように語っている。「はじめてのクラスにいったとき、私はこちらから子どもに話しかけたり、誘ったりしないことが多い。手もちぶさたで不安定なのは私の方であつて、その不安から逃れるためにさわがしくして、私の必要に子どもを巻きこんだら、子どもの姿が見えなくなるであらう。」
- 3 倉橋惣三『育ての心』上巻（フレールベル館二〇〇八年）の中の、「こころもち」より。
- 4 倉橋惣三『幼稚園保育法真諦』初版（東洋図書一九三四年）第2編「保育の実際」の扉の言葉より。